猪犬と登る猪猟の頂点 2

田宮 治

総括の大一番

ワン、ワン、ワン……と、静けさを突き破るブル号の力強い寄せ鳴きである。

「斉藤さん、出ましたよ！」

立ち止まって聞き耳を立てると、そこは千葉特有のストンと落ちるV字谷で、崖下に広がる竹林の茂みあたりである。すぐにヨシ号やブイ号、カツ号たちも寄りついたようで、見事な寝屋止めとなった。

「止めたぞ！斉藤さん、どうぞ」

いつもどおりに促す。しかし、止め現場は最悪で、とても直行できる所ではない。

それでも斉藤氏は「行きます！」と元気良く、馬の背のような長峰を大きく回り込むようにぶっ飛んで行った。

「さて、どうしたものか」と思案するが、私はこの崖を下りるしかないようだ。

そう決心した。谷底では無線が通らなくなる心配があるので、「親方、取れますか。出ましたよ！大物が行くから頼みます」と言い残し、全犬の鳴き声を目がけて、急斜面を木やツル草を掴み必死で谷底に下り立った。

止め現場は思いのほかなだらかであるが、真竹藪とツル草の茂みで身動きができない。

すぐ近くでギャン、ギャン、ガゥオー、グッグッーと激しくやり合っているが、姿を見るどころか、近寄ることもむずかしい。

大物特有の牙を鳴らすガチャ、ガチャ音と、グォーッ、グォーッ、ワン、ワン、ギャン、ギャンで大藪が揺れ動き、山が割れるような大騒ぎである。

あっちに行ったり、また戻ったり。急斜面の所で攻めあぐんでいるが、下に回った斉藤氏もなかなか来ない。無線で呼びかけても返事はない。がっちりと寝屋止めしているというのに、どこからも寄りつけない焦りで気がもめる。

犬群は私の接近に気づいているらしく、ますます元気で大猪に咬みに入ったようだ。いつもならば、この辺まで寄ったら必ず大声で「ジジが来たぞ。それ頑張れ！」と檄を飛ばすのである。

今日の犬たちのブル号と富士美号、ヨシ号は二秋目で何の心配もないが、ブイ号、カツ号、ムサシ号はまだ仕込み中の十カ月で、兄弟犬である。何とか、そっと静かに寄って撃ってやりたいと思っていた。

「なあに、大丈夫さ。どんな大猪だって負けるわけがない」

そんなことを考えながら、下から来てくれるはずの斉藤氏を待っていた。

「斉藤さん、取れますか。どうぞ」

いつもならば、山を知り尽くしている斉藤氏は私より先に寄りつき撃つのに、どうしたことか返事もない。「私が撃ってもよいのか……」と、さらに呼びかけるが、全くだめである。

「仕方ない、よし行くぞ！」

気合を入れ、真上から枯れ竹をバリバリ踏んでの急接近となる。当然のように、大猪はすぐ下の真竹藪を横に飛び、斉藤氏が走った

長峰から落ちる小沢の下で止まった。

「よし、あそこなら撃てる」

そう思って鳴き声を頼りに必死で追った。姿は全く見えないが、地面に残る足跡も半端ではない。この藪をバリバリ突き破り、地響きを立ててあのスピードで飛ぶとは、何たる強さだ。犬たちも逃がしてなるものかと、ワン、ワン、ギャン、ギャンと強烈な咬みを連発しているようで、すさまじい迫力である。

藪の中をひた走り、急斜面を何とか抜けて、少し高い所から次なる止め現場を確認すると、長峰から小沢が下りている少し開けた所であるが、相変わらずの茂みの中である。一〇〇キロくらいまでの猪ならば、その小沢を登って逃げるしかない場所なので、まずは、いただきのケースである。

犬たちだって、若犬が主力のこのパックで入念に磨き上げ、何十回となく激戦を物にしてきたし、そのたびごとに強くなっている。今度こそはと、やっと近寄るが、大猪はまたしても動いた。しかも小沢伝いに上に上にと登って行くではないか。何という強さだ。

六頭もの自慢の咬み止め犬群を尻目に、止まっては登り、またしても止まる。この小沢伝いに出峰を越えるつもりのようだ。

そう思って追いながら地面を見ると、そこには猪道がきちっと残っていて、大猪がいつも使っている通い路のようだ。出峰の上が大きく凹み、急斜面にただ一カ所の猪の逃げ道になっている。

この猪道に乗って、大猪ならではの逃避術である。「この登りで必ず撃たねば」と、懸命に追う私を尻目にどんどん登り詰め、絡み鳴く攻防音はとうとう窪地を越えて行ってしまった。

「何くそ、負けてたまるか！」

こうなったら今日は必ず俺が撃つぞ！と覚悟を決め、やっと長峰の頂上に立った。こんな時、即役立つのが単独猟でいつもやって覚えた俺流の攻めである。

今日は石井親方と、この五年間私の先に立って山案内をしてくれている勢子長役の斉藤氏の三人猟である。

猟好きのグループではあるが、さすがに正月を二日後に迎える三十日とあっては出て来られないらしく、斉藤氏が大掃除を済ませ駆けつけてくれた午後からの猟である。

いつも大勢でタツを張り、猪がかわいそうなくらいの追い込み猟なので、猪が獲れるのに慣れて当たり前のようになっている。

石井氏は「三人で大丈夫かなあ……」と不安をもらすので、「私は三人もいれば十分だ。止め犬猟はそのほうがかえってよい。必ず犬たちが止めますよ」と、ずばり言い切った。

私にしてみれば、三人で単独猟よろしく犬たちを自由に狩り込ませ、勢子役から解放されて各々が攻め手であり、撃ち手であるこの日の猟が来るのを待ちわびていたのである。

その上、入山する民家近くの孟宗竹藪は大猪の掘り起こしで、まさに絶好のチャンスが到来したと思ったのである。

やっとのことで長峰の上に立ち、犬たちの鳴き声を確認する。峰の窪地を直進し、ダンゴになって攻め落としたいつもの谷落としの道が一直線に山下に続いている。犬たちは、大沢が始まる四、五本の大杉のあたりでまたきちっと止めている。確かなことは分からないが、石井氏は愛犬三頭を連れて、下に広がる大沢を登って来ているはずである。

「石井さん、取れますか。大猪を長峰の左側の谷底の四、五本くらいの大杉あたりで止めていますよ。取れますか、どうぞ」

山の上からなので聞こえるはずなのに、何の返事もない。

「斉藤さん、取れますか。どうぞ」

やっぱりだめである。斉藤氏はこの峰をぶっ飛び、止め現場に回り込んでいなければならないのに、どうしたのだろう。こんな大一番では、相手のいる位置はたえず確認し合っていなければとても危険で、安心して猪を撃てないのである。

今日の猪は、そのうちに咬み殺すだろうなどとノンキにしていられない恐ろしい相手で、まさに一

刻を争う激戦の中にあるのだ。仕方がないと、犬たちの止め現場目がけて一気に飛び下りていた。そこは山頂からの絶景とは打って変わり、急斜面と岩場の続きだ。

その中を、犬たちが残した一本の足跡道を頼りに必死で追い続けた。犬群はますます元気で、その闘争音は山々に響き渡り、すさまじい戦いになっている。犬たちの鳴き声に急き立てられ、藪をくぐり、ボサをかき分け、ずり落ちたり、こけながら死にもの狂いで追っかけた。

「何くそ、負けてたまるか！」

これが俺の求めてやまない単独猟であり、真剣勝負ではないのか。俺の駆けつけるのを待ち焦がれ、必死で呼び続けている声を間近にして、俺が遅れをとって何とする。

やっとのことで四、五本の大杉が見える高台に立てた。思わず、いつものように「頑張れ！　すぐ行くぞ！」と大声で怒鳴っていた。

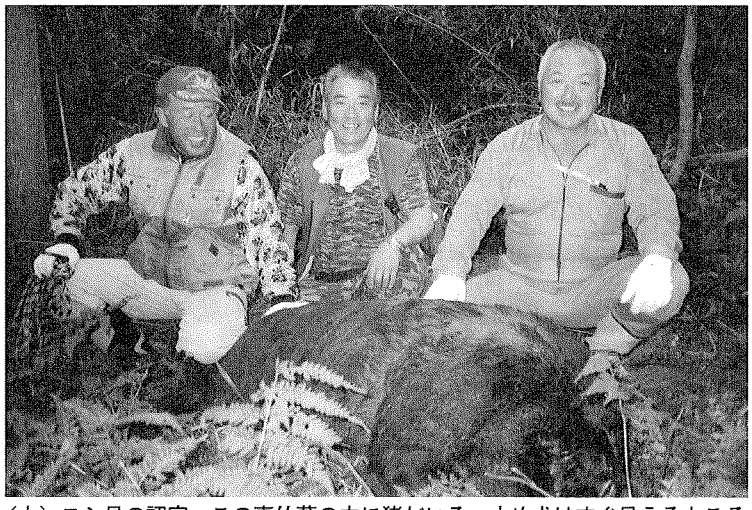
若犬が一緒だからとか、そっと近寄って撃ってやりたいと言っている場合ではない。少しでも犬たちを元気づけ、猟友には「俺が来たこれから撃ちに出るぞ！」という大切な合図で、二、三人猟では猪に寄りつく時にお互いが守らなければならない重要なことである。相手と自分を守る絶対の条件なのである。

よしよし、これでよし。銃も腰のナイフも改めて、よし、あと三、四分だ。犬群にも声が届いたらしく激しさを増し、まさに力で大猪をねじ伏せているようである。もう絶対に逃がしはしない。よし行くぞ、とさらに大声を張り上げながら最後の力を振り絞ぼって駆け出した、その時である。

「ダーン」

思ってもいなかった一発である。あと一〇〇メートルくらいで犬たちの戦いぶりは手にとるように分かっていたのに、誰が撃ったのだろう。

「どうなりましたか？」と急ぎ無線で問いかけるが返事がない。銃を撃ったというのに犬群の鳴き声は途切れるどころか、ますます



（上）ヨシ号の認定。この真竹藪の中に猪がいる。止め犬はすぐ見えるところにいるのが肝心である、動きが変わり、少し離れたら「ワン、ワン、ワン」と猪発見である。そのように仕上げることである

（下）中央が勢子長の斉藤氏。両側は大猪の運び出しに駆けつけてくれた喜びの面々

勢いづいて、死にもの狂いで咬み込んでいるようだ。

「いかん、これは犬たちの一大事だ」

あの大猪では、まともであるはずがない。「どうなりましたか？」と念を押すが、相変わらず返事がない。この緊急時にどうしたというのだ。「返事をせんか！」と怒鳴りたい気持ちをぐっと飲み込み力に替えて、ぶっ飛んで現場にたどり着いた。

そこには石井氏が呆然と立ち尽くしていた。「どうしました」と大声で言うと、「当たったはずだが…」とウロウロしている。その目の前に全犬が大猪に咬み込んでいる死にもの狂いの現場があった。

何と、こんな大猪だというのに彼の若犬まで加わっているではないか。見慣れない二頭が猪の周りにいて動き回っている。咬み込んでいる全犬は見えないが、頭にかぶりついているブル号は血だらけで、右脇腹が大きく切られている。

二発目を撃ち込めずに立ち尽くしている石井氏に、「すぐにやらないと犬が危ない」と言いながら、銃に安全をかけ一本の杉木の根元にそっと置き、猟刃を握りしめ犬たちの中に飛び込んだ。

しかし、そこは小川の水のない、スポッと腰まで入ってしまう草に覆われた幅一・五メートルくらい、長さ四～五メートルの舟形の窪地で、とても中で刺せる所ではない。

しまった。焦って飛び込んだばかりに身動きもできない。上からならば、膝をついて手を伸ばして刺せば簡単なものを……。

犬たちが一メートルくらいの深みにはめ込んで攻め続けているのだから、大猪といえども這い上がっては来られない。刺せないにしても、落ち着いて手を伸ばして撃てば、どこでも狙えたではないか。

そう思って、窪地から飛び上がり銃を取りに戻ろうとしたが、ここは一番、石井氏に撃たせたいと気づき、すぐ近くに立っている彼に「首の付け根をよく狙って撃ってください」と大声で怒鳴っていた。

石井氏は我に返ったように、すかさず一発を撃ち込んだ。私は大猪の崩れるのを見て、まだ猪が動いているのに窪地に飛び込み、まずブル号を大猪から引き離した。ブル号が心配で、そうせずにいられなかったのである。

当然のこと、六頭の自分の犬は刺しに飛び込む時から一目で確認している。ヨシ号は左足の付け根、ブイ号もカツ号も後ろ足に食いつき、大猪でも絶対に動けないアンカーを打ったような見事な止め芸であった。この頭数を掛ければ、どんな猪が出ようと必ず勝つと信じていた。

ブル号はどんな猪でも一瞬で射竦めを完了。一直線に顔目がけて咬みに入る、「咬み一番犬」である。まだまだ二秋目で、あと一秋は守ってやりたい自慢の咬み止め犬なのである。

ブル号はいつものとおり、この大猪に一歩も引かず咬みまくり、ついにこの場に追い込んだのである。そして頭に咬み込んで大猪の戦力を断ち切り、身をもって友犬たちを大猪の牙から守って頑張ったのである。

それなのに俺はブル号を守れなかった。一刻も早く刺してやりたかったのは、私のことを信じて勇敢に戦い通し命を懸けて待ち続け、そしてこんな大ケガをした。いや、させてしまったようなものだ。殺させてたまるか！と思って飛び込んだのである。それでもブル号はうれしそうで、まだ大猪に咬みつき、離れようとしない。

「よしよし、ブル。よしよし、ブル。よくやった！」

私はブル号のど根性をみた。撫で回し、抱きかかえるようにして、すぐ近くの杉の木につなぎ、また抱きしめてやった。ブル号の胸と前足の付け根から脇腹にかけ手のひら大の毛皮がぶら下がり、無残なまでに真赤な口を開けている。こんな大ケガなのに、傷などものともしないで私に飛びつき喜びを爆発させている。

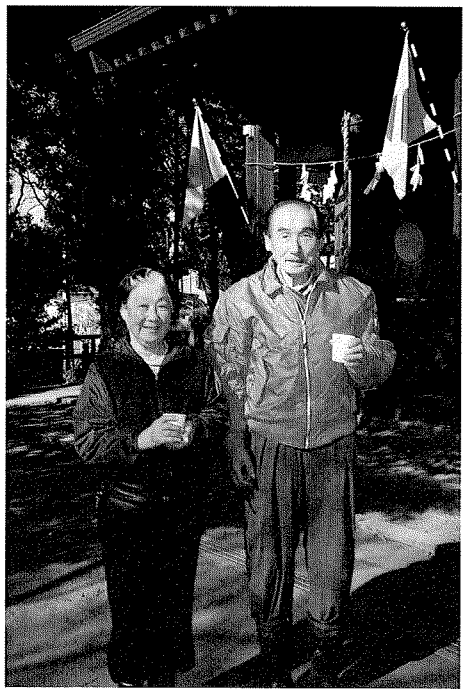
「すごい子になったなあ……ブル。よしよし、ジジが必ず治してやるからなあ」

体全体と頭を何回も撫で、跪いて抱きしめていた。再び現場に戻り、ヨシ号から同じように褒めて撫で回し、全体を点検しながら

次々とブル号のそばにつないだ。幸いなことにブル号以外はケガなしでほっとした。

「ここで待て」と命じ、急いでまた現場に戻った。石井氏の顔をまともに見られないほどの緊迫状態から解放されたが、彼もやっと安堵したようで、笑顔で私を迎えてくれた。大猪の獲れたことを心から喜び合ってガッチリと握手した。

改めて猪を見ると、まぎれもない牡の大物である。足跡で大物と分かっていたが、「すごい猪だね」と話しているところに斉藤氏が駆けつけて来た。



これから犬舎に。猪犬作りには正月もお盆もない。神社でふるまってくれる甘酒でささやかな正月気分、元気が何より（平成22年正月）

千葉の山は小峰が入り組んで藪がひどく、見通しが悪い。大猪は想定外の逃げ道に乗ったので、山を知り尽くしている彼でも、迷いに迷ったようである。

窪地に動かなくなっている大猪を見て「おお、これはでかい。これを咬み止めたのか？」とびっくりしている。

石井氏の若犬三頭だけが、まだ咬んだり鳴いたり飛び回っていた。ブル号たちのあの見事な恐ろしくなるほどの止め現場は想像できなかったと思うが、窪地に残る血まじりの格闘現場は、見ただけで全犬の戦いぶりがしのばれるはずである。

「すごいなあ」と三人で心から喜び合った。すさまじい大猪との戦いはこうして決着がついたが、私にはまだブル号にやってやらねばならない大仕事が残っている。

「石井さん、この若犬たちはよい機会なのでこのまましばらく咬ましておくといい」

そう言い残し、心配なブル号の所に急いだ。「大丈夫かブル？」と、傷口をすぐ下の流れできれいに洗ってやった。ブル号は一秋目の初猟でやはり大ケガをしたが、石井氏の車の荷台で私が縫ってやって治している。それからは連戦完勝で、ケガなど全くなく安心し切っていたところである。

ブル号を見た斉藤氏は一大事と、私の医療用品の入ったリュックを取りに車まで戻ってくれた。快晴の猟日和ではあったが、走りに走ったようで、大汗をタオルでぬぐいながらリュックを持って来てくれた。

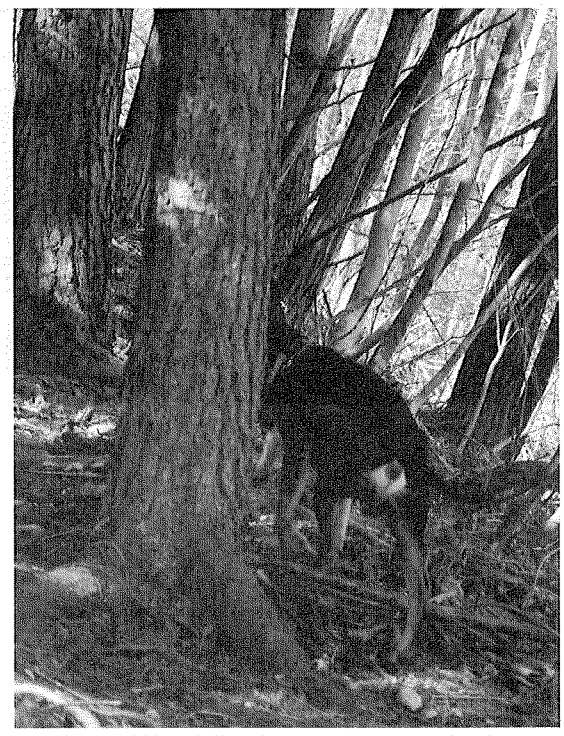
「ありがとう。早かったね」とお礼を言いながら、一刻も早くと、大きく裂かれた手のひら大の皮を縫い合せようとするが、よほど痛いようで、今日のブル号は斉藤氏の手をはねのけ暴れて、どうしても縫うことができない。これは獣医に行く以外ない。

ひとまず全犬を車まで引き戻した。もう一度石井氏の所に引き返し、獣医に行くことと、ブルの結果を告げた。わずかな時間を利用して記念の写真を撮ったが、もう石井氏もすっかり落ち着いた。大猪の獲れたことを心から喜んでくれ、「凄いものだ」と盛んに犬たちを褒め、感激している。

いつも飲んで気分が良くなると、「猪猟で知らないことがあったら俺に聞け、と書け」とか、「猪の脳天撃ちの石井だ」と豪語しているさすがの石井親方でも、これだけの激戦は初めてのようで、絶対に刺さねばならないあの状況下で堂々と刺し止めることができなかった。

がっちりと窪地に追い込み、ブル号とムサシ号が頭に、ヨシ号たちは両手足の関節に、それぞれ役割分担しているようにがっちり咬み込み、絶対に動けなくしている

マロ号、ヨシ号（黒）、シロ号。この3頭ならばどんな猪でも見事に止め切る。今日はマロ号が後ろ足に行き、ヨシ号とシロ号が頭を攻めている



どの山でも峰筋の猪道を狩るのがポイント。木の根元に猪が体をこすった縄張り跡が続く

のだから、一刻も早く止めを刺さねば大変なことになるのである。窪地ぎりぎりに立ち、思いきって手を伸ばせば、刺すことも、撃つことだって五〇㌢くらいの突き止め撃ちが簡単にできるのである。

何も今さら石井氏を非難しているのではない。私の存念を言わせてもらうならば、「大物だ！　止め切っている」と呼び続けているのに、なぜ、大事な連絡が一度もないのか。また、あんな激戦の中に何で若犬の訓練犬三頭も入れたのか。猪猟を何十年も究めた石井氏が、どうしてこんなことをするのか。正直私には理解できなかった。

私は入山する時に、猪跡などで使う犬群を考えて決めているのである。仮に一〇〇㌔の猪ならば、私の犬は二〇㌔くらいなので、力でこの猪をねじ伏せるのであれば猪の体重と同じになる五頭、つまり一〇〇㌔をめどに犬芸をも選び狩り込むのである。この頭数ならば全犬ケガもなく、ぎりぎり戦って止め、勝ち、獲れる犬力であると考えている。

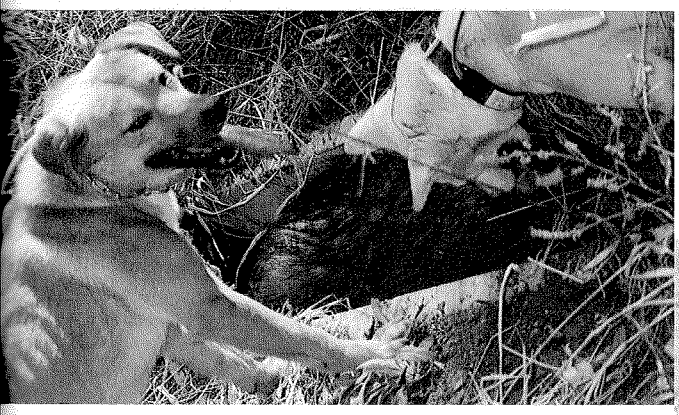
それより多いと犬同士が邪魔し合って、咬み止めている犬たちの身を守ること、つまり牙を交わす守りができなくなるのである。

ブル号は二秋目になるが一秋の初猟以来何度となく、こんな激戦を完勝してきたがすべて無傷であった。そのことを一番知っているのも石井氏であり、斉藤氏である。

今回のブル号の大ケガの原因は犬が多すぎたことと、やられる前にやってしまわなかったことである。犬たちはあれほど見事に完勝していたのに、攻めきれない私が一番駄目だったことである。

ブル号は残念ながら終猟まで使えない結果となったが、私はそんな事柄は一切言わず、三人で一三三㌔の大猪を獲ったことを心から喜び合っていたのである。

ただ、私がこの大一番を反省、評価して締めくくりたかったのは、猪止め犬の一流芸をがっちりとサポートする猟人の確かな実力、つまり腕と度胸に裏打ちされた確実な止め刺しの大技がどうしても必要なのである。



（左）マロ号とシロ号、ヨシ号で猪をU字溝に追い込む。こんな時には銃は跳弾の恐れがあることと、犬たちをかわして撃ちづらいので刺し止めることが大事なのである。ほとんどが窪地に追い込み勝負がつく
（下）猪は必ず溝などに追い込んで止める「止め芸」が最高である

これを会得していなければ、どんな激戦でも安心して戦って至上の喜びなど摑み取れないと言いたかったのである。

その上に、危険は絶対に回避し、仲間や入山者、そして大切な愛犬などをきちっと守るために声をかけ合い、行動の前に連絡は必ずする。そんな安全策をしっかりと身につけておかないことには、とても単独とか二、三人での止め犬猟はできないのである。

さらに大切なのが、犬持ちならば当然のことであるが、命を懸けて頑張る犬の気持ちの分かる猟人になることである。

猪を獲るのが目的だけで、まだ狩っていて帰らぬ犬を捜しもせずに全員帰ってしまったり、一生懸命狩り込んでタツに追い込んでもタツが全員引き揚げていたり、死にもの狂いで戦って大ケガをしても手当てをするのは犬持ちであるといった考え方が、特に親方とか先に立つ者にあってはならないことで、大間違いである。

当然のこと、私はどんなことがあっても犬持ちの責任と思い、何も言わずに黙って乗り越えてきた。これからの猪猟人に求められるのは、猪が獲れて喜び、犬を捜し見つけて喜び、大ケガを治して大喜びし合うような、大きな意味での思いやりの気持ちが最も大切なことである。

全員で戦い、全員が心の底から喜び合う全員の猪猟の中にこそ、明日へ繋がる本筋の猪猟道も見えてくると私は思う。山彦会千葉支部では、その辺のことを重点的に押し進めていきたいと思っているところである。

敗戦で知る猪猟の神髄

それこそ何十年も猪猟を究めた達人であっても、いざという時に思いどおりの刺し技などできるものではない。追い犬を使って何年も頑張ったところで、そんなチャンスに巡り合うことさえないのが普通である。

そんな体験のない猟人は、止めている猪を刺したり、二〜三メートルから撃つ止め撃ちならば簡単にできると思うはずだし、何であんな大きな的を外すのだろうと思うのは当然である。

ところが、不思議なことに、どんなベテランでも必ずというほど撃ち外すのである。それほどまでに、止め犬猟による猪止め現場は見る猟人を圧倒し、狂わせ、いつもの勝負ができないのだ。

撃ちかけて外せば、よほどできる犬群でなければ、引き続きがっちり咬み込んだままで止めおけない。

ごく普通にやってきた体験から言えることは、撃てば必ず犬群は

パッと四方に飛び散るのである。もし当たらなければ、これ幸いと猪はトコトコと藪中に逃げ込んで一巻の終わりである。

一流芸と言い切ってはばからない猪の獲れる犬群ならば、どんなに近くから撃とうが、刺そうがびくともしないし、ますます強く咬み込み絶対に離れない。

そのためには、仔犬の時から猪皮で引き合って遊ぶことから始まり、チャンスは必ず撃ち獲ってやることである。犬たちも、猪を咬み止めていれば、必ず主人が駆けつけ撃ってくれるという信頼関係で成り立つ究極の犬芸なのである。

物事には必ず順序があり、確実に順序を踏み、地固めしながらやり遂げないことには、一足飛びに究極の犬芸とか、最高の猟技には到達できない。

もしその順序、つまり手順を間違えたり、急ぐあまりに飛び越えれば、必ずそれは無理なことに繋がり、危険を招き、犬に大ケガをさせたり、最悪取り返しのつかない失敗をする。そんな考えから、私は十分手順は尽くしてきたつもりだし、くどいほど説明しているのである。

あと一つ残っている大技、止め刺しを見事実行するために、ちょうど良い充電休みになった正月も過ぎ、松飾りが取れるのも待ち遠しく山梨へ出かけた。

山梨で単独で犬たちをきちっと調整し、意気込んで山彦会千葉支部に出向いたのは、平成二十二年一月十二日であった。

この日は北嶋氏が仕事で出られなかった。平野さんと加藤君の三人でホームグラウンドの山を狩ることになったのだが、困ったことに獲りすぎたようで、猪がめっきり少なくなって、足跡を探すのも苦労するようになっていった。

平野氏はワナの名人なので大きな声ではいえないが、これまでに仔猪が三頭とか親子六頭が箱罠に入っていたりすると、できることなら逃がしてやりたい気持ちになった。現実問題として、そんなことはできるはずもないのだが。

私は山梨や群馬で一軍犬群を使って猪猟を楽しんでいる時は、四〇〜五〇キロの猪がグッグッ、グッと落ち葉を蹴散し、鼻を鳴らして元気に飛んで来ると、「それ、頑張れ！」と仔猪にエールを送り、見えなくなるまでライフルのスコープで追うのである。

山梨の山は見通しが良い。撃つ気になれば二〇〇メートルでも、三〇〇メートルでも木に添えて、確実に狙えばどんどん撃てる。そのため猪もめっきり少なくなった。

昔の良い猪猟場はどこも鹿に占領され寂しい限りである。そんなことから、仔猪ならば「元気でまたな……」と見送るようにしている。若犬の訓練で、ここは一番決めなければと思う時以外は「仔猪くらいは逃がしてやりましょうや」と言うのが私の本音である。

そんな時、犬たちは「ジジ、猪が来ただろう？　どうして撃たないのだ」というように、目に見えて元気がなくなる。

そんな犬たちを呼び止めようとするが、またひと時、追って行く。よくしたもので、逃げ一手の四〇〜五〇キロくらいの猪は逃げ足が速く、撃たなければ逃げ延びることが多い。ただ一軍犬群だと、山を越えた所で止めてしまう。これがまた大変なことになるが、猪の多くなるのを願っている。

駆除の概念からすれば成り立たない、恥ずかしい考えかもしれないが、現実に猪のいない猟場は寂しいものである。

三人で三時頃までホームグラウンドの隅々まで猪を探したが、小物一頭発見できなかった。まだ、犬殺しの大猪は獲っていない。

残された出峰の先端、そこに必ず潜んでいると狙いを絞り、平野氏と二人で攻め込んで行った。加藤氏は、いつも犬三頭が鳴く民家近くの小道伝いに上がる峠にタツを張ってもらった。

「残ったどん詰りだから、猪が出れば必ず行くから頼みます」と告げ、細心の注意をしながら狩り進んだ。平野氏には峰筋を歩いてもらい、私は八合目の猪道を犬たちと歩いた。平行に狩り進むことで狩り残さないように、また猪が出た時に寄りやすいように攻めていた。

（つづく）